～災害に強いまちづくり～

東日本大震災の伝承ネットワーク

11月13日（金）

敬愛大学経済学部

矢口和宏

東日本大震災（１）

震災の状況

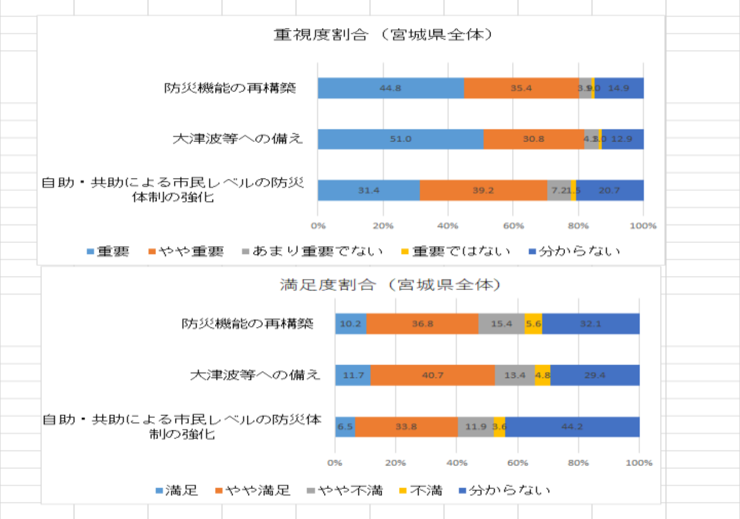
	阪神・淡路大震災	東日本大震災	平成28年熊本地震
発生年月日	1995年１月17日	2011年３月	2016年４月16日
地震の規模	マグニチュード7.2	マグニチュード9.0	マグニチュード 7.3
震度６弱以上の県	兵庫県	８県（岩手、宮城、福島、茨城、栃木、群馬、千葉、埼玉）	熊本県・大分県
災害救助法の適用	25市町	241市区町村	45市町村
被災地域の特徴	都市部中心	農林水産地域中心（特に沿岸部）	熊本県内全域（山間部も含む）
被害の特徴	建築物の倒壊、神戸市長田区を中心にして大規模火災が発生	大津波により沿岸部で甚大な被害が発生	死者のうち約半数以上は、災害による負傷の悪化又は避難生活等における身体的負担が原因
死者	6,434人	15,897人	273人
被害額の推計	約９兆6,000億円	約16兆9,000億円	約2.4～4.6兆円

出所：廣野・矢口（2020）『東日本大震災から10年　再生・発展における課題の分析』」p4

東日本大震災（２）

- 伝承ネットワークの重要性
  - 「東日本大震災復興構想７原則」の第１原則
  - 「失われたおびただしい「いのち」への追悼と鎮魂こそ、私たち生き残った者にとって復興の起点である。この観点から、鎮魂の森やモニュメントを含め、大震災の記録を永遠に残し、広く学術関係者により科学的に分析し、その教訓を次世代に伝承し、国内外に発信する。」
  - 2011年５月29日東日本復興構想会議
  - 下線部は筆者による

防災・伝承の意識（１）



出所：宮城県「令和元年県民意識調査結果」より

防災・伝承の意識（２）

- 防災施策に対する重要性の意識は高い
  - 「防災機能の再構築」と「大津波への備え」は80%以上が重要と回答している。
    - 「重要」と「やや重要」の合計
- 防災施策に関する満足度はやや不十分
  - 各施策の満足度は50%弱である。
    - 「満足」と「やや満足」の合計
- 防災施策の重要性は認識しているが、施策への満足度がそれに追いついていない。

震災伝承ネットワーク協議会

- 「震災伝承ネットワーク協議会」
  - 国土交通省東北地方整備局内に設置
  - 2018年７月に大震災の記録や経験、教訓等を伝える震災伝承をより効果的・効率的に行うためのネットワーク化に向けた連携を図ることを目的に発足された。
  - 2020年６月19日現在で、被災３県（福島、宮城、岩手）を中心にして、236件の震災伝承施設が登録されている。
  - 「3.11伝承ロード」の構築に向けた動き

震災遺構・伝承施設（１）

震災遺構荒浜小学校（宮城県仙台市）

現在、小学校に通う生徒はいないが、震災の記録を残すために保存されている。
説明役が震災当時の様子や学校内の様子を説明してくれる。

震災遺構・伝承施設（２）

震災遺構荒浜地区住宅基礎

現在、荒浜地区は災害危険区域に指定されており、居住者はいない。
この写真は居住者がいた頃の住宅基礎であり、震災遺構として保存されている。

震災遺構・伝承施設（３）

石巻市立大川小学校（震災遺構整備工事中）

「大川伝承の会」共同代表の鈴木典行さんが語り部として活動している。
鈴木さんの次女は震災時の在校生で津波災害で亡くなった。
視察当日は東北放送の取材があった。

震災遺構・伝承施設（４）

気仙沼市東日本大震災機構・伝承館

伝承館は、旧気仙沼向洋高校校舎を保存する形で建てられている。
この写真は4階にある通信室にあったレターボックスである。津波の到着の跡が残る。

震災遺構・伝承施設（５）

高田松原国営追悼・祈念施設

祈念施設内には「奇跡の一本松」がある。

左の写真は津波伝承館の中にある、震災当時の国土交通省東北地方整備局内の再現であり、震災の状況の把握に努めた。

震災遺構・伝承施設（６）

大船渡津波伝承館

津波伝承館はBRT大船渡駅に隣接されている「大船渡市観光物産協会」内にある。

地元在住のボランティアの語り部が、映像資料をもとに震災当時の話や教訓を説明する。

震災遺構・伝承施設（７）

いのちをつなぐ未来館（岩手県釜石市）

未来館は釜石市鵜住居地区にあり、近くには、ラグビーW杯でも使用されたスタジアムがある。

震災当時中学生だった語り部が、当時の避難経路を案内してくれる。

震災遺構・伝承施設の特徴

- 震災遺構・伝承施設の特徴
  - 自治体直営のものもあれば、NPOを含め純粋に民間で運営しているものもある。
  - 展示物や映像が中心の施設もあれば、被災体験をもつ語り部による説明が中心になっているものもある。
  - 多くの施設は、津波による建物の破壊状況や残存物をそのまま保存している。
  - どの施設を訪れても、「津波てんでんこ」の意識が必要なことを強調している。

伝承ネットワークの課題（１）

（１）将来に渡って維持や保全が可能か？

- 維持管理のコストの問題
  - 例）気仙沼市の「伝承館」
  - 震災遺構をそのままの形で保存することになり、年間維持費がほぼ倍になった。収支均衡のためには年間で75,000人もの来客が必要になる。
- そんなに伝承施設は必要かという疑問
  - 効率性を考えれば、伝承施設は一定の被災地域をまとめたうえで整備することが望ましい。
  - 被災地ごとに震災の被害は異なり、被災地ごとに伝承施設が存在することも意義がある。

伝承ネットワークの課題（２）

（２）「語り部」の継続性

- 被災経験をもつ方や遺族の方による説明は、たいへん説得力があることは確かである。
- 被災した地域は高齢化がすすんでいる地域であり、高齢の語り部が多いのも事実である。
- 手弁当で語り部を続けることの難しさは理解しないといけない問題である。
- 数十世代にわたって教訓を語り継ぐためには、語り部の映像資料化が有用である。

伝承ネットワークの課題（３）

（３）震災遺構・伝承施設の立ち位置

- ◆伝承施設や震災遺構が責任の糾弾の場になってはならない。
- ◆津波災害による人為的な失敗を過度に強調し、そのことを責める場に変質してはならない。
- ◆震災遺構・伝承施設をめぐる旅は、「ダークツーリズム」としての特徴はあるが、それが過度に間違った方向にいかないかが重要である。
- ◆震災遺構・伝承施設は、歴史的な事実を伝える場であることを再確認することが重要である。

さいごに

- ◆津波災害の伝承について
  - ◆津波災害の伝承がしっかりと行われてきたからこそ、「津波てんでんこ」の考えは残った。
  - ◆東北の沿岸部に残る石碑や神社は、津波災害の教訓を後世に伝えようと、当時の最新技術を用いて予算を費やして建てられた。
  - ◆現代の技術では、映像や伝承施設という形で、津波災害の教訓を残すことになる。
  - ◆教訓の風化は避けなければならない。